瀧井孝作
尾崎一雄
上林暁集

31

日本文学全集

瀧井孝作
尾崎一雄
上林暁集

日本文学全集 31

日本文学全集31　瀧井孝作　尾崎一雄　上林　暁　集

昭和四十五年十一月一日発行

著　者　瀧井孝作　尾崎一雄　上林　暁

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版　株式会社精興社
本文印刷　多田印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社

瀧井孝作集　目　次

無限抱擁　五
慾呆け　一八
積　雪　一二七
父祖の形見　一三九

尾崎一雄集　目　次

芳兵衛物語　一五三
虫のいろいろ　一四二
美しい墓地からの眺め　二四九
まぼろしの記　二六〇

上林　曉集　目　次

ちちははの記　三〇七

野　三三三
晩春日記　三四七
聖ヨハネ病院にて　三六〇
嬬恋ひ　三八二
青春自画像　四〇三
聖ヨハネ病院再訪　四一五
春の坂　四二八
御目の雫　四三七
年譜　四五四
人と文学　浅見淵　四七七

口絵写真撮影　瀧井孝作　「婦人公論」写真部
尾崎一雄　NHK写真室
上林暁　田沼武能

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

瀧井孝作集

無限抱擁

一

一の一

浅川駅よりトンネルもなくなり空は夜明であつた。

車室の窓ぎはで一人、信一は、靄の間から麦の穂の赤むで居る有様に向いて、

「もう麦が赤む」

と呟いた。麦畠は知らぬ間に色づいて居る。暫時心ひかれた。彼はまた

「戻つて来たなあ」

と自分に云うた。上の電気の点つて居る、網棚に被り笠、糸立、岳樺の杖、（案内者が山刀で伐取り拵へて呉れた）其が脇に置いてある。

彼は温泉で錆びた銀蓋の懐中時計を、セルの袴の上へ引出した。新宿へ到着までにまだ一時間の余ある故、体は窓ぎはへもたれ彼は寝不足の頭を束ねた糸立へおし当てた。

浅い谷間の窓外に見える、東中野辺りで目が覚めた。車室に学生等が乗込んで居た。

信一は池袋までの切符故、新宿駅で降りて乗換をした。山の手電車の中で、彼の風変りの提げて居る笠が目立つた。

朝曇りの空だつた。池袋の道の上を歩いて来、路端の新規に店出した小間物屋の前で、信一は歯みがきの類を買つた。

何時もの雑司ケ谷の友達の家は、空屋であつた。信一は其板戸の前で暫時へんな気がした。目白駅の方角の引越先が貼紙に出て居た。

而して信一は復歩いて、尋ね当てた。

原中で平屋建で、友の古びた名札が門柱に掛けてある。生垣内は三坪程の前栽、其処の雨戸は閉され、まだ寝て居る。

其住居は始めてで信一は、起さずに一人門の前で立つて居た。信一は、盆槍竹むで旅行の引続の甘い感傷に浸るのだつた。曇の空から雨の粒が落ちた。僅かに降出し、信一は笠を提げて行むで居た。

銭湯を思ひうかべた。一晩石炭殻を被つた気持の悪るさ、草臥が銭湯でぬけるなれば、自身は色々の仕事のある体故、すぐ其にかゝれると思へた。彼は、歩き出した。

雨は本降りになり一時間程後、信一は戻つて来た。被り笠糸立で、湯上りの彼は汗ばむだ。着物の銘仙の羽織に沁こんで居る、温泉の香がきつく匂つた。

門は未だ開かなかつた。
やがて、遅く起きた中田夫婦は、信一を内へ入れた。
彼は、雨水の笠と糸立は外へ寄かけ、上り口に袴を脱いで置いて、座敷へ入るのであつた。
床の間を見て、一寸見てゐた。白日掩荆扉とある半折の出来栄が目に附いた。
中田が薄目で、眼鏡の玉をぬぐひつゝ来て坐つた故、彼は尋ねた。
「先生の字」
「六花さんダ。先生の処にころがつてゐたのを貰つてきた」
中田は同人の書の会に加らぬ人であつた。其趣味は厭だと云うて、連中を傍観してゐたが、之を表装して居る処では、中田も何時か一歩寄つて来て居た。
信一は自身の今朝新宿駅へ着いた由を云うた。先づ仕事の方を共にやつてをる雑誌の運びを尋ねた。
友は肯き、今日校了になる筈でもう僅だと答へた。信一に向き
「徳永君が心配して居た故、けふ逢ふと良い」
と云ふ。用向の話は其丈であつた。
例の女の方の話、両方で口に云はなかつた。
信一は具体的な考へができてない故曰へず、中田は取留のない心やりの聴手になれぬ故。
「飯にしようや」
年上の友は膝をもち上げた。
柱など節々の多い茶の間に、食卓は備はつて居た。茶の間の隣の室には姿見などがある。(中田は西国の方のくろうとの女と二人暮しをして自分を立て貫き、三四年になる。今度は極く普通の借屋住居で、二人は平凡になつて落着いたのだ。)
信一は自分もやがて左うなる、自分の女との暮しを思ひ、茲の有様に気注ぐのであつた。
丸髷のかづさんも坐つた。熱い飯で、やき海苔、うに、味噌汁の菜で、常の通りである。茶湯台の傍で、彼の旅先の土地の事柄が話題になつた。
かづさんも、彼の事情は知つて居て其を口に云はなかつた。向合ひ面白くからかふには余り重たい男だし、また道筋を漸と通つた自分共夫婦故、いゝ加減は曰へなかつた。
「やみさうもないナ」
信一は縁側へ起つて、空を見た。
「出掛けるかナ」
「うむ」
玄関でかづさんは彼の持物は
「預つて置きましよ」
と云つて、傘と足駄を揃へて居た。
左うして中田と連立つて出、信一は旅の引続の気分は殆ど無かつた。
伝通院の前で、友と別れて彼は電車を降りた。××学寮

で、恩人の徳永翁に逢へる。それは商用で出て来て、国の子弟の居る学寮に泊る人であつた。

信一は昨年居た寄宿舎で、知合の学生に何気ない顔で、廊下を通つた。

彼は徳永翁と差向ひになつた。彼は自分の話は田舎で打開け、翁は上京後訪ねた方へあて手紙を寄越して居た。

「雑誌の方は、中田君ひとりのやうぢやつたから」

質実な翁は、仕事の方を心配してゐた。

「え、今逢つて話して来ました。これから印刷屋へゆく筈です」

彼の問題については

「戻つて来たら、先生も自分らと共に話をしたいと云つて居られた」

「はあ」

「今晩、皆で飯でもたべてだと良いな」

と云ふ。信一はH師に何か云はれる覚悟で

「ぢや、根岸のH師の宅に来て頂きます」

と其場所を定めて云つた。徳永翁は肯いた。

十分余り居て、信一は出掛けた。

路傍にある自働電話で、彼女へ戻つたこと云はうか稍迷つたが、今日は逢へぬ故と思ひ止つた。

例の神田の印刷所では、残り少い校正で二人居なくてもよいので、信一は又、根岸へと向ふのであつた。H師に何から話す考へは別になかつた。

（女とのゆきたてを左に雑とかく）

吉原の□屋に勤めて居る女――本名は松子――を二タ月前四月から見染めて居るのである。

四月の十日に山谷で書の方の会合が、例会でなしに酒を飲む催しがあつた。席上友達の青舎にこんな事を頼まれた。昨日家を出た儘で内へ工合悪いしこんなに飲むと又脱線して明日中田と約束してある旅行が出来ないかも分らぬ、信一君共に家へ来て明日旅立させて呉れないかね、と云ふ頼みであつた。信一は青舎の事情を知つてゐた故、気の弱い友の用心棒になる事を承知した。其晩新聞記者のSと青舎と信一の三人は吉原へ廻りお茶屋へ上つた。信一は酒飲ではないが附合し明夕方まで青舎の連れであると思つた。青舎は其晩も帰り外れた。あくる日信一は青舎と中田との旅立を上野駅で見送つたが。

そんな塩梅に青舎と共に出掛けて、用心棒の信一が却つて入つたのであつた。その朝、彼女に云はれた。

「お顔が、昨晩と異つて居ますワ」

友の青舎は十日程の旅行から戻つた。信一は入谷の宅へ出向き友と顔を合せた。旅行の土産話は胸ををどらせた。汽車の窓で見た向ふ山板谷峠辺の残雪の感じ。山の肌に残雪が川と云ふ字に消残り素的な書の線に見えた話。又羽後の酒田には仏頂和尚の書のある話。某家の古い見事な座敷造りの話。こんどの総選挙で或人に一夜土地の遊郭を奢られて、翌日政談演説をした話。

而して旅して気持の動いた故で、かなり捉はれない句作の出来た喜悦。其はこの頃信一も同じ故ノートを見せて喜び合つた。

信一は自身も話が溜つてゐた。□屋へあれから三度、と事を云つて「樹木か何か揺さぶられて居る様な」自分の心持を訴へるのであつた。

聞いて青舎は、其が恋だらうね君に其芽生が出たんだねとわく〳〵した。結婚生活と云ふ話まで出ると、青舎は肯かなんだが、しかし彼女の年齢——彼の二つ下の二十二歳——を尋ねたりした。

其晩中田もやつて来て三人で浅草の方を歩いた。信一が相手の女の気持を懸念してゐる事を曰つたら、中田は「相手は石塊でも瓦の片でもよいよ、自身が燃えて居れば何時か動く」

と中田の場合かづ女は後で動いた例を持出した。それから

「□屋では、女の居る場所は悪いね、やり難いね。君は思ひ断るかまはず突進するか、二タ途だ」

とズカ〳〵と云ふ。又

「これならと思ふ女はさう無いから、好きな女が見当れば とるのだが」続けて又「金があるとねエ、一ト月程居続して飽きがこなかつたら立派な者故、女房にするんだがね」

と、中田はあすこで五六日も居続せうものなら退屈で叶はない其経験談を持出した。

足は何時か吉原へ入り例の茶屋へ上つた。仲之町の一番外れにある茶屋だつた。魚河岸××の若主人時分の青舎を見知る芸者が居て青舎は顔がきいた。女中頭の千代に信一の事を何かとたのんだり、青舎はその晩彼女を見る心組であつたが

「大店はシンミリしない。□屋は厭だ」

中田は持前を云うて肯かず、彼一人送られて往つた。

或日信一は青舎と雑司ケ谷の中田の宅へ出掛た。もう五月に入つて居た。雑司ケ谷で、青舎は来がけ電車の中で見かけた女の話を云ひ出した。信一は引取つて

「真向ひに腰掛てゐた、仏像の顔のやうな娘さんでしよ」

と云うて又

「窓口から、頸すぢへ日が射込んでゐた故、僕はうしろの鎧戸を閉めてあげようかと思つた」

「まあ、信一さんは」

と、茲の細君は聞いてさう揶揄んだ。信一は之まで女など に目もくれない木強漢で通つてゐる故。

「物のあはれを知る人だ、ねエ、いゝね」

と、青舎は弁護した。信一は唐突に呟いた。

「旅行、しようかなあ」

——彼は彼女をあすこから出す資力は勿論ない、よし連れて来たにしろ其暮しの道も立ない身であつた。何処からも資は出さうでなかつた。彼の周りで一番生活の幅のある根岸の先生も此間「つゝじの白ありたけの金をはらひぬ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

の句を作り、其清貧を打明けて笑はせてゐた位である。また信一自身の心持が、ぐらり〳〵動揺するのだつた。彼は彼女に逢ふ毎に其実生活が分り、彼はどぎまぎした。逢始の頃は只恍惚感に涵れたが、今はもつと息詰る状態が多くなつた。併し其重荷は浪曼的なもの故に、彼の頭の方向を僅か反らした折

「旅行に出ようか」

と云ふ考へが出て来た。——

其詞を聞き友達は稍々面を上げた。

「旅行か、うむ宜いね」

中田は頷いて云つた。信一は思ひ迷つたがやがてそれを定めた。雑誌の仕事を中田に頼んで任せた。

根岸へ廻り先生に云ふ事とした。——この間、先生は其甥の受験生の不勉強の話をした故、信一は自分の図星を指されると思ひ、僕も非道い事をして居ます、と云つたら、君は未だ純粋な方だ、と先生が云つた——

信一は根岸で先生にあつて、唯旅行したくなつたと云つた。彼は女の上は告なかつた。先生は別に理由はきかず旅費を出して呉れた。

又、入谷の友の宅へ行つた。

「さうか、本当に旅行に出るの」

「えエ」

話して居て晩になり、青舎は雑司ケ谷へ行かうと云うて、今晩は中田に敬意を表すと常談口で細君に着物を出させ、信一を伴うて門に出た。当時彼は茲から吉原の裏門へゆく坂道を「十五分間小径」と名づけてゐたが、其道の方へ友の足は向き、オヤと思つて信一は続いた。

「立つ前に逢つた方よいねエ、自分も今晩は、見る故」

友の甘い味ひを彼はうけいれた。

「君は、女の人が僕を何う見たかを、たづねるのだね。君と女の人と見方が似るか。わかるからね」

「では、今晩女のいふことを、出先で手紙に書きます」

「逢つた工合で、旅行は、変るかも分らぬねエ」

「えエ」

翌日彼の処へ青舎の端書が届いた。啓、昨日之私は言葉も行ひもすこし脱線気味の処があつたやうですゆるして下さい御旅行は決定しましたか是非さうなさる事を祈ります深く祈ります今日は朝からからだの工合がわるかつたのですが今はよくなつて仕事してをります。

信一は岐阜で約束の手紙を書いた。出立際に逢つても引留られる程でなかつたが、友は別れて旅立てと云寄越した、彼女の印象が悪いかと思へた。青舎の返事は田舎へ来た。

ゆうべは根岸の俳三昧でした此頃はあなたが出席されてゐないと淋しい心持になりますあしたは私の家もう一夜は三の輪の三味私はこの淋しい心持を続けねばなりませんね

あの時の第一印象は御目にかゝる形式がへんなものであつたのでめちやめちやになつてしまひましたあの方が

私を外的ではありますがかなりよく見てをられたので驚きましたいや驚くといふのは仰山のやうですが私からは第一印象の外的丈でも握み得られなかつたからですどうも私といふものが時に臨みてしつかりすることが出来ないのを恥ぢます

それでこのことはこれだけにとゞめておきたいと思ひますあなたとして定めてはがゆい様に思はれませうがどうか忍んで下さいさうしてこのことについては考へないで下さい色をつけないで下さい

あの部屋で病人のやうだと申上げたのを気にかけて下さいますな何んでもないのですたんにあの時の感じに過ぎないのです

さだめし御淋しいことがおありでせう万々御察し致しますどうか大事に旅行して下さい

一昨日徳永君へはがきを差上げましたそれは内容は申上げずに只信一君の今の心持をやすらかにして上げて頂きたいといふやうなばつとした事を申上げたのです万事あなたが徳永君に御相談でもされる場合のきつかけにもと思つたからです

先生へは私が話をしました先生の心持は良好です御安心なさい

たよりを書くといふことは気をまぎらすものです御たよりを下さい徳永君に宜敷御伝へ下さいこれで擱筆しますどうも言足らないのですが

青　舎

五月六日

――□屋ではお附合で上つた客には女を逢せない極りの由で、青舎は僅すれ違ひに相見た。あの晩部屋は扉とよぶ西洋間で、彼の寝床の傍に皆が附添うてゐて「病人のやうだ」の詞が出た。其処へ、彼女が新造と下新をつれて入つて来、友は起つて出て往つたのであつた。彼女は友達のことを「新規さんですわ」と云うた。シンキなる詞が呑込めず何度も尋ねて、若々しい人当世風、といふ意味が分つた。青舎はすれてゐない瑞々しい人故、其方面が第一番に映ると思へた――

青舎の手紙を徳永翁に見せた。徳永翁は商用で月末に東京へ出る由であつた。

彼女の手紙が岐阜から廻つたのと共に二通来た。

昨日はきれいなはがき有がたうございましたまあ長良川といふ川はずゐ分きもちのよささうな川ですわねわたしとあなたと長良川とやらに手に手をひいて旅行することもある事でせうねあたしそれをたのしみにして待つてをりますわ、お手紙はけふたしかに拝見致しました益多屋のお千代さんからもよろしくと申しましたおハガキはたしかに御らんになりましたさうです、あなたがお立になつてから早いものですわねもう五日にもなりますわわづか五日やそこいらでもあたしずゐ分たつたと思ひ舛わあなたお里方へいらしておやご様がさぞおよろこびでせうねあたしもうれしう存じ舛又古里ですぎた前の事をお

思ひでせうねそしてさぞおなつかしき事でございませうねあなた旅故おからだをおきをつけて御無事でね、先はお返事まで　十六日のひる前にて　あなたの松子　たびの信さま　返事かく心はゆく御もとへ　わが心は……

そんな風に信一は旅行に出て廿日程の日数、旅行の楽し味は脱がさず味うて居た。そして旅行で得た楽し味で、心持は幾分明るくなつてゐるのであつた。

（如上の出来事があつた）

根岸に行くと、何時もの鏡ノ間を通つて、一足下りる能舞台の裏側の座敷――その書斎の真中程に、丑師は一閑張の机を据ゑて居た。

信一と顔を合せて、先生はうむと肯いた。

彼は坐つて、旅先で出来た俳句をまづ見てもらふのであつた。清書する暇なくて句稿のノートの儘さし出した。

一応目を通して先生は

「どうも弱いね」

そして具体的に云つた。

「下まで皆一息に云つてあるのは少なく、大抵二つに断れてゐる。上の句下の句ときれてゐるのは、気持が張らないのぢやあ、ないかね」

作句はよく云はれなかつた。信一は

「盆槍してゐたのかなア」

と旅行中の自分を顧見た。張つてないと云はれることは、彼女に生温い気持でゐるわけ故、痛手であつた。

「中で採ればこれ〳〵などかね」

丑師は指で教へながら、句稿を戻した。

尋で信一は、徳永翁の事を伝へた。先生は肯いて

「君の考をきいて見ようと思つてゐたが。女は何んな人なのだ」

彼は縁端に横坐りでゐた。

「正直な素直な。あゝ云ふ場所にゐてそれが染てゐないのです」

「女の態度に技巧は見えないのだね」

彼は点頭いた。

「で君は、その人でなけあ、ならぬのか」

「自分の仕事の上からも、ぜひ必要なのです」

「それで」

「女はもう二年程居れば出られるのです。その間一切逢はぬことにしようか、とも考へて居るのですが」

「君は不安はもたないかね」

「大丈夫と思ひます」

先生は色々にたづね、彼は自信づよく女の方も確かであると述べた。

「これから辛いよ、さう思へるがね」

「えエ」

そんな問答があつた。彼は問の意は深く考へず、いや、味ふ余裕はなかつた。只答へを云うた。暫時して、信一は

「青舎君の処へいつて来ます」

「うむ」

夕方迄に戻ると云つて彼は出かけた。

青舎と顔を合せた。例の物こま〳〵無造作にある居間で、信一は膝をくづした。

「今先生に逢つて来た」

と、根岸の話を云うた。また彼は、半紙の上に旅先の句を書いて、旅行談にうつるのであつた。

諏訪

くわりん花木作りの風日にきてみし
底水になつてる蓮の嫩葉を見下ろし
月のしまひの諏訪の湖水にきて手紙読む

安房山にて案内者と共に

朝のうち白檜の葉を布きいこふ
カンヂキが朽葉によごれて別るゝなり

田舎にて

今の私の単衣を造りくれる尺をとり

信一は田舎の年上の芸者に出逢つた事を云つた。

「こんどは姉を見るやうに打明話ができたのです」

「徴兵検査で逢つたとかいふ女のひと」

——以前、徴兵検査で帰省してもとわけのあつた年上の女と再び結びついた話したが、其折青舎はそんな話があるなら安心だ、之まで用心深くて君は近づけない人とばかり思へたが、と悦んだことがある——

「えエそのひと」

昔の女に向いて、□屋の女に深入してゐて一寸田舎へきたといつたら、お金を拵へにでしよ、妾は何も出来ませんよ、着物もないのでしよ、などと云つて夏の物を造つて呉れるのであつた……。

信一は出来事を告げた。

友達はにや〳〵した。其話を色気なしに自然に云ふ故。

「複雑なものがあるが、くろうとよりほかもたない心理だね」と肯いた。

そんな工合に話は尽ないが、やがて根岸へ寄合ふ筈の事を信一は思つた。

而して其晩、上根岸の方の溝川に沿うたある鳥屋へ飯をたべに出かけた。H師、青舎、中田、徳永翁と信一の五人づれで。

開業したての家で新しい造りの部屋へ通された。彼はかしはの鍋かと思つたら、一つ一つ調理した品数を運ぶのであつた。彼は神田の方で昼時分蕎麦をたべた腹なので、鳥料理はうまかつた。H師、青舎、徳永翁は酒の方であつた。青舎は酔はないと自分の意見は出せない性でまた何か座に居づらい風で酒の力を借りたがるのであつた。

徳永翁に向いて、H師は云つた。

「竹内の考は、さき程聴とりました」

「はい」

「僕は是まで左う云ふ噂はきかなかつたし、竹内は女の事などは経験しなくても分る男だと思つて居りましたが。今

度は当り前の人だと思ふのです」
――この二月、雑誌の記念会のあつた晩、青舎が酒に酔つて何か女の話をしやべつて居り、信一は以前の年上の女を頭に置いて、僕はもう通過したなどと一口に云つてのけたことがある――
H師は続けて
「それで竹内は子供のやうに単純なのだ。赤児の縁端に出てゐるのを見て、いまに落ないか知らと思はれるやうな、あぶない感じがする」
「……」徳永翁は点頭いた。
「それで吾々はどうするかだが。僕は唯見て居るほかない。竹内のする通りに任せるのだ」
先生はさう云ひきつて、信一の方を見戍つた。
「突放すのは」
と、青舎は顔を上げた。先生は
「中田はどうか」と尋ねた。
中田は前にも云つた、思断るか、他の意見など顧みずどんどん行処まで行くか、二タ途だと述べた。自分で後者を践んで来て居るので、其言には或味があつた。
青舎は
「左うも出来ないさ」と云つて手拭で額の汗をふいた。
「未だ学生でありながら、女のことなどにかゝはつてゐるのは、勉強の緊張が足りないと思はれる」
其は徳永翁の詞であつたが、信一は月々学費の援助など受けてゐたが、理解なしに云はれるとは思はなかつた。
徳永翁は、皆から意見して貰ひたい塩梅であつたが、H師も留めるやうには曰はない故、
「これからどうなるか心配だが」
と云つた。先生は笑ひながら
「そんなに心配されるのなら、其家へ往つて女が性の悪い人間かどうか先づ見て来られたら如何です」
而して又、其で駄目になる人間なら之も仕方がないのぢやないかと云ふ意味の事を述べた。
「ひどいな。しかし落胆しないやうに、僕は君についてゆく」
と、青舎は信一に向いて曰ふのであつた。
信一は頬笑んだ。
彼は敷島の吸口の紙をほごして三角の筒に折り拵へて、煙草をふかして居た。その三角の吸口が傍のはいふきに幾つも挿つて居た。――それは彼女の巻莨の飲方を真似た物である。このことでは、中田は円い吸口のまゝ莨をのむ故、いつか青舎の居間の火鉢に二種の吸口が並び青舎は「ほう」と云つて両方を眺めた事がある――
信一は先刻から自分の事を曰はれ稍大袈裟故、弱つて居た。始先生に意見され留められるかと思つたら放任される事となつた故、其方は自由になつて有難いと思へた。
H師は信一に向き、左う云ふ場所の女だからいけないと云ふ議論も一理あるし、左う云ふ場所の女に構はず本気に

なる気持も亦肯ける、と云ふ意味のことを述べた。
而して先生は、女中が酌をすると「うむ」と云つて酌をさせるのであつた。
十時頃鳥屋を引揚げた。雨の跡のうるんだ町筋であつた。先生の宅の前で
「寄らないか」
と云はれたが寄らなかつた。徳永翁は明日起つて関西の方へ廻り帰国する話をした。
四人になり深い泥の通りを往き乍ら、青舎は
「今晩は、突放すのは非道い」
と、云はぬと気が済まぬ故云つた。中田は
「先生は見捨るわけでなく、大きく見てゐるのでせう」と応へた。
「Hが昼間竹内の考を聴取つたとかだが、そんな工合に聴いたつて分らぬし、どうも機械的だからね」
青舎は先生とは永年の関係で親しみから呼捨にして居た。
坂本二丁目の方角へ向いて往つた。浅草の方の空は際立つて明るい。信一は彼女に逢ひにゆかうか知らと思つたが、亦旅行から引続の疲れた顔を見せたくない気持もあつて迷つた。徳永翁は
「竹内君は、今晩は学寮へ行つて泊らないか」と誘ふのであつた。
中田は鶯谷の方へ曲り、入谷へ入る青舎は電車道で電車の来る迄二人の傍に佇んで居た。信一は学寮へ従いて行く事にした。

一の二

かゝりの女中が湯へ往つて居る由で、彼は暫く坐つて居た。
年寄の女将が上つて来、坐つてお時儀した。――昨年七十の賀の済んだといふ婆さんだが、面長の含綿といふ物をして居るかのやうな、向合ひ居ると、昔盛りの頃の嬋娟さが滲み出て来るやうな或雰囲気がある――女将は彼の話について往時の旅のことを云つて相手した。
客に伴はれて仙台の方へ往き、冬の事で、寺か宮か何でも高い石段のある一杯雪の積むだ所へ見物にいつて、得う段々を上らなかつたと云ふ噺。
彼は年寄の話の聴手になつて、筋でなしに情緒を語る噺故事柄はもどかしかつたが、聴き方で面白味はあつた。
かゝりの阿千代は、湯上りの額に汗をつけて入つて来た。何時も曲げつけた頭髪の簡単な、四十年増である。
直ぐあちらへ行くことにして、彼は今夜は少し飲むと云ふ故、阿千代は首の細長い酒徳利をさげて出た。そして誂物を云ひにいつて来る間、彼は人通りの多い□屋の前に佇んで居た。
昼間電話でお座敷の方を云つて置いた故、すぐに三階の彼女の所へ通つた。
次の六畳の居間で、長火鉢の傍の松子（玆の通称でなし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo